

研究と報告の違いを考える

教育研究批判の内容で多く見られるのが、「教員の研究は研究ではなく報告である」というものである。実際、研究よりも報告と呼ぶ方が適当と考えられるレポートを目にすることも多い。文献や研究の実態から、研究と報告の違いについて考察する。

■ 研究と報告はどう違うか

「これは研究ではなく報告ではないか」と指摘されるものの多くは、学校での実践をまとめた「実践報告」の内容を持つものである。同じく実践をまとめたものでも、「実践研究」は研究として認められている。

従って、この項では、実践研究と実践報告の混同について検証することとする。

研究会や研修レポートとしての研究では、いわゆる「実践研究」が大多数であり、多くの教員がこの「実践研究」を行っている。（実践研究の解説については後述）

西田⁶⁾p21は、実践研究と実践報告について、次のように述べている。

実践(的)研究と似て非なるものに実践報告というのがある。実践報告は「・・・しました」という形で終わり、普遍性を追及する形にならないのが普通である。現在の学校現場で公表されている研究論文や実践研究のまとめの中には、「こうしました、ああしました」という実践報告に似たものが見られる。

しかし一方で、西田⁶⁾p124は次のようにも述べている。

学校現場で書かれる実践報告でも、このように実践しましたということだけでなく、実践の結果、何が問題点として提起されるか、効果としてどのようなことが得られたかなどを結論として書けば、立派な実践研究の報告になる。

これらの記述と先に示した教育研究への批判、研究の定義などを考え合わせると、研究と報告の違いは次のようにまとめられる。

報告（実践報告）・・・子ども等への働きかけとその結果をまとめたもの
研究（実践研究）・・・子ども等への働きかけとその結果から、相関関係、因果関係を読み解き、
新たな事実や事象（問題点の提起や方法の提案など）が提示されたもの

教員研修において求められている「研究」は、「報告」ではなく「研究」である。

従って、実践の記録を綴るだけではなく、教育活動に潜む教育的な課題や事実を見つけ出し、提示していくねらいを持って研究活動を行うことが必要であろう。

「研究」と「報告」についての理解を整理することによって、教育研究に対する批判の多くは解決できるのではないかと考えられる。研究と報告の違いについては、「研究のまとめ方」の項でも触れる。